

# Case Study

支部ケース・スタディ

中国支部

## 地元活性化を目的とした映画制作事業への参加

### Kビジョン(株)

放送制作部 次長

宗森 達司



### 下松の魅力为全国へ

#### 下松フィルム・コミッションの設立

映画の撮影誘致や支援等を行うフィルムコミッションは、2000年以降全国各地で設立されています。その多くは、都道府県や市町村などの自治体・商工会議所・観光協会などの公的機関が事業を行っており、ロケーション誘致・支援活動の窓口として、地域の経済・観光振興、文化振興に大きな効果を上げています。

山口県下松(くだまつ)市では、2013年に市の委託を受けて観光事業を行っている民間企業が下松フィルム・コミッション(以下、下松FC)を設立しました。下松市に本社を置く当社は、下松FCによる映画製作実行委員会のメンバーとして、設立当初から映画制作に協力しています。

### テレビとは異なる映画の世界

下松FCが最初に関わった作品が、アメリカ人写真家ブルース・オズボーン氏の活動を追ったドキュメンタリー映画「OYAKO」です。親子の絆の大切さを訴えるため、全国各地で「親子」の写真を撮り続けているオズボーン氏の活動とその思いを紹介する作品で、その中の親子をテーマにしたドラマの撮影場所の誘致を下松FCが行ったのです。

監督やカメラマンなど東京からのスタッフと一緒に、撮影補助スタッフとして当社の制作部員が同行しました。日頃から取材や撮影で地元を熟知しているケーブルテレビの強みを生かして、監督のイメージに合った撮影場所を提案することはできましたが、いざ撮影が始まると、テレビ番組の制作とは全く異なる現場に戸惑うことばかりでした。

ニュース取材やドキュメンタリー番組の撮影では、一度きりのチャンスを撮り逃さないスピード感が求められますが、映画やドラマでは監督のOKが出るまで何度も撮り直し、天候によっては長い待ち時間ができたり、撮影日を変更したりすることもあります。使用する撮影機材も初めて目にするものが多く、聞き慣れない言葉が飛び交う現場で、私たちは一瞬も気を抜くことができませんでした。

完成した映画「OYAKO」は下松市の映画館でも上映されました。エンドロールにスタッフとして自分たちの名前を見つけた時、ひとつひとつのシーンを丁寧に撮影し積み重ねていく映画の魅力と、そこに関わった喜びを感じました。



下松フィルムコミッションが初めて関わったドキュメンタリー映画「OYAKO」の撮影の様子とスタッフ一同

### 下松FC 自主制作映画への挑戦

初めにも述べたように、フィルムコミッションは撮影場所の誘致や支援活動が主な事業とされていますが、

2014年に下松FCは下松市制施行75周年の記念事業として、自分たちで映画制作を行うことを決めました。脚本のもとになる原案は一般から公募。下松市に隣接する周南市の大学教授であり映画監督の長澤雅彦氏に協力を依頼して、下松市でイチからの映画制作が始まりました。当社は製作実行委員会のメンバーとして、撮影機材協力・撮影スタッフとして参加。私自身はプロデューサーとして、予算管理や東京から招待した俳優やスタッフの対応にあたりました。

一般公募で選ばれた作品は「恋」。鉄道車両の製造工場で働く50代男性・昭男が、同じ職場で働く同年代の独身女性・咲子に思いをよせる大人の恋をテーマにした物語です。病気で亡くなった妻のことを大切に思いながらも、咲子に惹かれていく昭男の姿がせつなく描かれています。下松市は新幹線の車両製造工場があり、映画では昭男の職場という設定。また、昭男が亡き妻との思い出として回想するのが、毎年11月に下松市で開催される秋祭り「稲穂祭」。



下松FC初の自主制作映画「恋」の撮影の様子

ストーリーのあちらこちらに下松市ならではの場所や行事が散りばめられています。

撮影で苦労したのは、地元住民約300人のエキストラが参加して行われた「稲穂祭」の再現です。11月に行われる祭りを撮影したのは残暑厳しい9月。冬の服装に身を包んだエキストラのみなさんにとっては、何時間にも及ぶ撮影は辛いものだったと思います。祭りを運営する地元住民の協力がなければ、このシーンを再現することはできませんでした。

完成した映画「恋」は、11月の下松市制施行75周年記念式典で初上映され、その後、下松市の映画館で期間限定上映、東京や神戸・大阪でも上映され、翌年2015年にはDVD版を制作・販売しました。DVDには当社が制作・放送したメイキング映像や、映画完成までの日々を追ったドキュメンタリー番組も収録されています。この作品をきっかけに「映画のまち下松」が本格的に始動することとなります。

## 2015年「10ミニッツ」 2016年「大城湯けむり狂騒曲」

下松FCは、2015年に「10ミニッツ」、2016年に「大城湯けむり狂騒曲」と、年に1本のペースで映画の自主制作に取り組みました。

「10ミニッツ」は、下松市制施行75周年記念の映画制作の原案募集で「恋」と同じく優秀作品に選ばれた「10minutes」を原案とした作品です。ラジオDJに憧れる女子高校生が、ネットラジオで地元の情報を発信しながらふるさとに思いを馳せ、成長していく姿を描いた物語です。主演をつとめた高校生をはじめ、出演者のほとんどがオーディションで選ばれた地元の人たち。ナチュラルな演技とさわやかなストーリーが評価され、2016年の知多半島映画祭では最高賞のグランプリ、札幌国際短編映画祭では観光庁長官賞、2017年の第15回中之島映画祭でも最高賞のグランプリを受賞しました。

「大城湯けむり狂騒曲」は、下松市笠戸島にリニューアルオープンした国民宿舎大城を舞台にしたコメディ作品で、オープン前の施設を貸し切



2015年制作「10ミニッツ」の撮影の様子とスタッフたち

り、多くの地元住民が出演する作品となりました。

いずれの作品にも私自身はプロデューサーとして、また、当社社員が撮影スタッフ・メイキングスタッフ、出演者やエキストラとして参加しました。作品の数を重ねるごとに監督からの要求も高くなり、その度に悩みながらも要望に応えていく姿を見て、スタッフひとりひとりのスキルが上がっていくのを感じました。コミュニティチャンネルの制作業務もこなしながらの映画制作は体力的にも精神的にも負担のかかるものでしたが、テレビ制作の現場にはない独特の緊張感は確実に当社の制作部の成長につながっています。



2016年制作「大城湯けむり狂騒曲」の撮影の様子

## 映画祭の開催

「映画のまち下松」として、映画制作だけでなく映画が楽しめる企画ができないか。2017年9月、下松市笠戸島で初めての映画祭が開催され、私は長澤監督と共同プロデューサーとして、社員は上映スタッフ・司会・運営スタッフとして参加しました。

「青春と夏」をテーマに、一般には公開されていない若手監督による短編映画等3作品を上映しました。来場



2017年9月に下松市笠戸島で初めて開催した映画祭とスタッフ一同

者には、映画などの撮影現場でスタッフが食べる食事・ケータリングをふるまったほか、地元住民による海鮮焼き、金魚すくいや射的など、夏祭りのような雰囲気でも会場を演出。チケット500枚は完売し、多くの方から「また開催してほしい」との声をいただきました。

何よりうれしかったのは、映画祭の開催場所となった地元の人たちが、映画祭の成功を喜んでくれたことです。会場となったのは、本土から橋を渡った島の一番奥にあたる深浦地区の廃校になった中学校跡地。交通の便も悪く、観光客が訪れることもほとんどありません。そんな深浦に多くの人々が訪れて賑やかになったことが、地元の方にとっては誇らしく励みになる出来事になったようでした。映画祭の後「大成功だった。ありがとう」と固く手を握ってくださり、無事に開催できてよかったと心の底から思いました。

## 映画と地域とケーブルテレビ

なぜケーブルテレビが映画制作に関わるのか。スケジュールに追われる中で、私自身そのように考える時があります。しかし、使う機材も撮影方法も考え方もテレビとは全く異なる映画の世界は新鮮で興味深く、そして多くのことを学ばせてくれます。

現在、当社の制作部では映画の制作でも使用されているカメラを導入し、その特性を生かした撮影・番組制作を行っています。また、自治体と共同でプロモーション動画を企画・撮影するなど、ケーブルテレビ局として地域に貢献できる事業の幅も広がったと感じています。

今後も下松市は「映画のまち下松」としてさまざまな事業を展開していくことでしょう。当社もその一翼を担えるよう、新しいことや未知の分野に挑戦しつづけるケーブルテレビ局でありたいと思います。